

樂園 第4話

takamiism

『穴の向こうへ』

「運命論の話が、あったけど」

「とても、強いよ」

「あらかじめ、決まっていはいない？」

「あるようにある、それだけだね」

「そうすると、何をしても無駄、ということ？」

「また、性急だね」

「そういう運命なんだよ」

「運命というのは、何の運命？」

「何の？」

「誰の、と言ってもいいけど」

「もちろん、自分の運命、だよな？」

「それだけ？」

「それ以外に、ある？」

「あるいは」

「何？」

「その自分というのは、何？」

「いや、何と言われても」

「どこから、どこまでが、自分なのかな？」

「自分の場所の話を、しているの？」

「自分という場所のことかな」

「意味が、よくわからなくなってきた」

「ニライカナイの穴、というものがあってね」

「何、それ？」

「太陽が生まれ、やがて消えていく穴のこと」

「そうなんだ」

「ま、そういうことです」

「え、どういうこと？」

「どういうわけだか、知らないけど」

「よくわからないんだったね」

「流れているものが、一瞬の間、集まって、離れて」

「どうなるの？」

「また、流れていく」

「一瞬の間に？」

「無限と有限、その間というか」

「また、難しい言い方をして」

「そこに永遠が、透かして見えるというか」

「えっと、何の話だったっけ？」

「私と世界は、切り離すことができない、という話」

「別々のものなの？」

「私というものがなければ、世界は立ち上がってこない」

「はじめにあるのは、私？」

「でも、世界がなければ、私というものは、こうして出てくることはなかった」

「それなら、世界が、先にあるの？」

「私と世界は、共にある」

「何やら、結論みたいなものが、出てきたね」

「もうここで終わり、というわけではないよ」

「でも、一応とはいえ、答えなんじゃないの？」

「謎は、謎のまま、残るんじゃないかな」

「ここまで、色々と話してきたのに？」

「ようやく、たどり着いたわけだ」

「どこに？」

「はじまりの場所に」

「おや、まだ、はじまってなかったの？」

「また、はじまるわけだよ」

「今度は、どこへ向かうの？」

「わからない」

「はいはい」

「ただ、挑み続けるだけ」

「それで、何から、手をつける？」

「探すところから」

「何を？」

「穴をね、ちょっと」